

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	形式意味論をめぐって：モンタギュー文法について
Author(s)	林, 勲
Citation	ニダバ , 29 : 151 - 152
Issue Date	2000-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048076">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048076</a>
Right	
Relation	



# 形式意味論をめぐって

## — モンタギュー文法について —

林

勲

形式意味論は、形式言語や自然言語を対象として、論理学や数学のような明示的で厳密な方法に基づいて意味論を構築しようとする試みを指している。

このようなアプローチは、特に形式言語を対象にして、真理条件意味論 (Truth-conditional Semantics)、可能世界意味論 (Possible-world Semantics)、モデル論的意味論 (Model-theoretic Semantics) などとして、命題論理学や述語論理学はもちろんのこと、内包論理学や様相論理学においても分析哲学やポーランド論理学の伝統の一部を形成してきていた。

内包論理学や様相論理学の厳密な手法を、形式言語に対してのみならず、自然言語の意味論記述に対しても適用すべく果敢に挑戦したのは、他ならぬモンタギュー (R. Montague) であった。60年代後半から70年代始めのことである。

モンタギューが提案した文法理論は三部門から構成されている。すなわち、自然言語（たとえば、英語）の適格文を導出する統語部門、導出された自然言語の適格文を内包論理言語の作りのよい式 (well-formed formula) へと翻訳する翻訳部門、そして翻訳された内包論理の作りのよい式にモデル論を通じて意味解釈を与える意味解釈部門である。

この文法の重要な特徴の一つは、フレーゲ (G. Frege) に由来する構成性の原理 (principle of compositionality) にある。すなわち「複合表現の意味はその部分の意味の関数として構成される」というものである。この原理にしたがって、言語要素の結合は関数子-項 (functor-argument) という関数関係として捉えられる。

さらにもう一つの特徴は、統語部門におけるルールと翻訳部門におけるルールとはそれぞれ 1 対 1 の対応関係 (one-to-one correspondence)、言い換えると同型性 (homomorphism)、を保つ形で与えられていることである。つまり、内包論理言語として翻訳された作りのよい式は、自然言語の適格文と統語的に関係づけがなされていることになる。

ところでモンタギュー文法は、様々な自然言語現象の定式化に貢献してきている。たとえば、内包的構造、量化詞およびその作用域、関係節構造などはもとより、一般量化詞、否定辞、その他などの種々の言語現象である。また、統語部門において適格文の導出ルールを担っているカテゴリー文法を、再び活性化させたことも見逃せない。（言語要素の結合を関数関係として理解する立場に立つとき、あるいは意味解釈へと導く中間言語としてなんらかの種類のタイ

プ言語を想定するとき、カテゴリー文法は非常に有効な装置として機能する。)

ところで80年代に入ると、状況意味論 (Situation Semantics) の登場をきっかけとして、形式意味論の流れは新たな動きを示してきた。自然言語のもつ複雑性の明示化や定式化された断片量の累積化が進むにつれて、論理学が自然言語の意味記述に課した厳格な要求そのものへの信頼が、逆に制約を与えているに過ぎないのかも知れないという反省へと転じ始めたからである。モンタギュー文法にも多くの修正がくわえられ、拡張モンタギュー文法 (Extended Montague Grammar) その他に変貌を遂げている。

現在では形式意味論は、状況意味論を始めとして、談話表示理論 (Discourse Representation Theory)、認知意味論 (Cognitive Semantics) といったものを含む多様なものになっている。